

【事例紹介】

# 甲南大学の海外短期プログラム -日本語教育実習とエリアスタディーズ-

Konan University Short-Term Overseas Programme: Japanese Language  
Teaching Practicum and Area Studies

甲南大学文学部日本語日本文学科教授 中島 孝幸

NAKAHATA Takayuki

(Faculty of Letters, Konan University)

キーワード：異文化交流、短期研修、留学支援

## 1. はじめに

海外プログラムで最も一般的なものは語学研修であろうが、本稿では甲南大学で行っている海外短期プログラムで、語学研修を目的としないものを二つ取り上げて紹介したい。一つは2002年度より台湾で行っている「日本語教授法実習」という科目名の日本語教育実習、もう一つは2009年度から開始された「エリアスタディーズ」というプログラムである。「日本語教授法実習」は文学部に開設されている日本語教員養成課程の仕上げの意味をもつ専門科目で、台湾の東海大学で毎年継続して行っているものであり、2017年夏に実施した15回目の実習で参加人数は延べ132人となった。また、「エリアスタディーズ」は、学部に関わらず履修可能な全学部共通科目に位置づけられる、フィールドワークと現地学生との交流を重視した体験型短期留学プログラムで、2009年度からの参加人数を通算すると2017年度で500人を超える見通しである。筆者は「日本語教授法実習」の担当教員であり、また、「エリアスタディーズ」についても台湾実施分についてこれまで三回企画と引率を行っていることから、両プログラムの内容とその意義についてここで述べることにする。

## 2. 異文化交流を目指した日本語教育実習

甲南大学で行っている海外における日本語教育実習について、詳しくは別に著した拙稿<sup>1</sup>を参照していただくとして、ここではその概略を紹介したい。筆者が担当している日本語教育海外実習の特徴は、台湾の学生との共同作業で異文化交流を進めようとするものである。甲南大学では2002年度より台湾

<sup>1</sup> 中島孝幸(2017)「日本語教育海外実習の意義と課題—甲南大学の台湾実習—」『甲南大学紀要文学編』167

の東海大学において日本語教育実習を行っているが、実習開始当初より、日本人学生が学習者に一方的に教えるという実習を避け、台湾の学生にも教える側に入ってもらい共同作業でクラスを運営するという形をとっている。まず、実習のためのクラスを、台湾で日本語学習を希望する人たち(主として大学生)を新たに募集することによって開設する。生徒募集とクラス分けは専ら台湾の東海大学の学生が担当する。クラスができたら、日本人学生と台湾人学生がチームを組み、教える内容やその方法について SNS 等を利用しながら協議する。教える内容は学習者のニーズやレディネスを考慮したうえで決められる。生徒募集は台湾で夏休みが始まる 6 月下旬には締め切れ、クラスごとの人数が確定して、8 月下旬のクラス活動に向けて準備が進められる。



東海大のシンボルである教会前で全クラス学習者と

クラス活動実施は 8 月下旬の 5 日間であるが、日本においては 4 月から毎週の授業で授業計画を立て、模擬授業を行う。また、授業準備とともに台湾事情について調べることも重視している。台湾の学生と共同作業を行う前提として、最低限知っておかなければならない台湾の歴史、文化、社会について知るためである。日本統治時代について、あるいは台湾の国際的立場についてなど、一定の認識をもっていることが、台湾の学生と共同作業を行う上で不可欠との認識に基づいている。



校舎中庭に出でのクラス活動

クラスは全くの初級から、日本語学科で専門として 1 年間学んだ学生の中上級クラスまで、レベル別に 5 クラス設定され、午前中の 3 時間、5 日間にわたってクラス活動が行われる。重点は、教える技術を向上させるというよりも異文化理解、異文化交流を深めることに置いているため、日本の食べ物や観光地を知る、台湾の食べ物や観光地を紹介する、旅行計画を立てる、といった内容や、歌やゲームを取り入れた活動が多い。

せっかく日本から来た同世代の大学生から教わるのであるから、日本の大学生の気質や考え方に直接触れることができれば、夏休みにこのためにわざわざ集まった学習者たちにとって充実感が得られるものとなるであろう。

本実習は、教えるチームを組む台湾の学生とのコミュニケーションを図ること、また、教える対象である学習者とのコミュニケーションを図ることの双方ができて初めて目的が達せられることになる。そのような目標を課しているのが最も大きな特徴であるといえる。

2002 年度に開始された実習は、その後継続して毎年行われ 2017 年度で 15 回目を終えた。実習に参

加して卒業した人の中には、台湾の魅力にひかれて台湾で日本語教師の職に就いた人が複数いる。また、必ずしも日本語教師の職に就かなくても、実習で異なる文化を背景とする人たちと理解し合おうとした努力、相手に分かってもらえて味わった達成感、うまくいかなかった際の焦り等、さまざまなことが心に残り、将来への糧となっていることは間違いない。将来日本語教師になるか否かに関わりなく多くの学生に参加してもらいたいと考えている。

### 3. エリアスタディーズで気軽に海外体験

体験型短期留学プログラム「エリアスタディーズ」は甲南大学において2009年度に創設された。当初、気軽に海外体験ができることを目指して、目的地はアジア地域が中心であったが、近年はアメリカへのコースも設定され学生からの人気が高い。2016年度の参加者数は、開設された6コース合計で86名、2017年度はすでに実施した分と予定している分の計8コースでそれ以上の参加者を見込んでいる。2009年度の開設以来2017年度までの参加者総数は500名を越える見通しである。実施主体は甲南大学国際交流センターで、スケジュール作成、説明会開催、参加申込受付から旅行社への手配等、事務取扱を全て行う。引率は全学に募って依頼した教員が行い、行程には事務職員1名が同行する機会が多い。

2017年度の行き先(予定も含む)は、ベトナム、韓国、マレーシア、シンガポール、台湾、タイ、アメリカである。異なる目的地のコースごとに、科目名「エリアスタディーズⅠ」～「エリアスタディーズⅩ」が割り振られる。実施時期は8～9月、あるいは2～3月で、実施期間は、アジア諸国の場合1週間、アメリカの場合10日間程度である。プログラムは、事前学習、現地学習、事後学習の時間数を勘案して、2単位認定できるよう構成している。事前授業では現地事情や訪問先についての知識を得る。現地学習では、訪問先の協定大学等で講義を受けるほか、プログラムによって異なるさまざまなフィールドワーク、実習等を行い、現地の学生たちと交流する。帰国後に成果の発表(プレゼンテーション)を中心とした事後授業に参加することでプログラムは終了する。

現地学習の内容はコースによってさまざまであるが、筆者がこれまで3回企画し実行した台湾での



台湾總統府前で10名の参加学生と台湾の学生たち

プログラムについて紹介したい。訪れた場所は少しずつ異なるが、いずれも「台湾に残る日本」といったテーマを設定した。台湾は1895年から1945年までの50年間、日本の植民地統治を受け、現在でもその名残が各地に見られる。プログラムでは、台湾總統府(旧台湾總督府)、台北賓館(旧台湾總督官邸)、国立台湾文学館(旧台南州庁)といった公的施設を訪れ、それらの建築物がどのような歴史を経て現在まで引き継がれ

てきたのかを考えた。また、公的施設だけでなく民間の建物についても、日本統治時代に建てられたものがどのように再生されて現代に生かされているのかを見て回る。例えば、台中では宮原眼科という眼科医院の建物が有名な菓子店となり、台南ではハヤシ百貨店が改装されて林百貨として多くの客を集めている。いずれも昭和初期に建てられ、戦後の一時期廃墟のようになっていたものが近年リノベーションを経て、レトロな雰囲気を生かして再生されたものである。それらを見学することによって、日本と台湾との関係の歴史、時代の流れとともに変遷した建物の運命、現地の人々がそこに抱く感情、といったさまざまなことがらを、身をもって感じ取ることができた。現地では協定大学の台湾人教員による講義があり、現場で説明を受けることによって、より深く理解することができた。

2017年夏のコースで訪れた場所のうち特に取り上げたいのは、烏山頭ダムである。烏山頭ダムは、日本人技師八田與一が1930年に完成させたもので、その灌漑事業によって広大で肥沃な農地が生まれたことから、八田與一は多くの台湾人に知られ尊敬されている。折しも2017年4月に八田與一の銅像の首が切り落とされるという事件があり、日本でもそのニュースが報じられ話題となっていた。烏山頭ダムは交通の不便な場所にあるため、観光コースに入ることは少ない。観光旅行ではあまり行けない場所に行き、観光旅行では不可能な体験ができるのがエリアスタディーズの醍醐味である。日本の大学生にはほとんど知られていない八田與一の名と業績を、このプログラムに参加した学生たちは皆よく知ることとなった。ただ、余談であるが、見学当日、八田與一の銅像の周りに虫が大量発生していて、修復された銅像を感慨深く見ている教員をよそに、学生たちは驚き騒ぐばかりで銅像には誰も近づこうとしなかった。こちらの思惑通りにいかないことが多い現実を示す出来事であった。



八田與一像

プログラムを実施するに当たって特に意識しているのは、現地の学生との交流である。フィールドワークにおいて台湾の学生と行動を共にすれば、台湾の学生が日本との関係の歴史をどう捉えているのか、現在の日本や日本人にどんな感情を抱いているのか、現代の台湾の学生の気質はどのようなものか、といったさまざまなことを感じ取ることができる。烏山頭ダム一帯には野外レジャー施設があり、前もって下見に訪れた際、そこでバーベキューができることを知りプログラム内に取り入れた。そこでは台南の長栄大学の学生たちと一緒に野外の焼肉を楽しんだ。見学も食事と一緒にすることで、その後も長く続く友達関係を築くことができるのではないかと思う。甲南大学のエリアスタディーズの大きな特徴は、現地の学生との交流に重点を置いていることである。なお、台湾コースでは協定校に日本語の学科があるため、コミュニケーションには日本語を用いることが可能である。

エリアスタディーズは全学部共通科目であるため、さまざまな学部の異なる学年の学生たちが参加する。最初に事前授業で集まった際には会話も少なくお互いよそよそしい雰囲気であるが、プログラ

ムを終えて帰ったときには、友人関係ができあがっていることが多い。1週間から10日の間、寝食を共にして海外に滞在することによって、集団行動の規律、他者への思いやり、不便さに対する忍耐といったさまざまなことがらを体験し、団結が強まり友情が生まれるのだと思う。異文化体験以外にも今後の成長につながるような経験をエリアスタディーズのプログラムはもたらしてくれるのだろう。

#### 4. おわりに

甲南大学では2019年の学園創立100周年に向けて、国際交流プログラムを飛躍的に進展させようとしている。その中で参加人数の点からも大きなウェイトを占めるのが本稿で紹介したエリアスタディーズである。エリアスタディーズは1週間から10日の短期プログラムであるが、それをきっかけに長期の海外留学へと歩を踏み出す学生は少なくない。異文化体験のステップとして、エリアスタディーズは参加しやすい有意義なプログラムであるといえる。

甲南大学では、先に触れたように「エリアスタディーズⅠ」から「エリアスタディーズⅩ」までの10科目を開講できるよう準備しており、近い将来には既存のアジアやアメリカ向けのコースだけでなくヨーロッパへのコースも開設する予定がある。引率教員の所属学部や専門、関心によってプログラム内容も多彩であり、訪問地もますます多様な所となってゆく。甲南大学の特色あるプログラムとして多くの学生にエリアスタディーズへの参加を呼びかけたいと考えている。

本稿前半で取り上げた日本語教育実習は現地の大学・教員との長年にわたる協力関係のもとに成り立っているプログラムである。エリアスタディーズも同様に、協定大学の強力なサポートのもとで実施できている。協定大学があってこそそのプログラムである。これまで多くの教職員が築き上げてきた相互関係の重みに思いを致すとともに、協定大学の教職員への感謝を忘れず、今後もこれらのプログラムを推進してゆきたい。



毎年発行される実習報告書

なお、日本語教育実習に関しては、毎年実施後に報告書を出して、参加者それぞれが実習を振り返ると同時に、次の実習がより良いものになるよう経験を伝えることにしている。

本稿では甲南大学で行われている海外研修のうち、日本語教育実習とエリアスタディーズを取り上げて紹介した。長期留学を含めた甲南大学の海外留学プログラム全般については、甲南大学の国際交流に関する基本方針も含め、伊庭緑(2016)<sup>2</sup>で詳しく述べられている。

<sup>2</sup> 伊庭緑(2016)「甲南大学の海外留学プログラムー学内国際交流から長期留学まで Hop! Step! Jump!ー」ウェブマガジン『留学交流』Vol. 62